

ナガサキの想いを未来に…助け合い、支えあう心を広げて…

平和を求めてナガサキへ

～原爆投下、そして終戦から今年で67年目の夏～

長崎市長のメッセージ

1945年8月9日、長崎は一発の原子爆弾により破壊され、一瞬にして街は廃墟と化し、約15万人もの人々が死傷しました。核兵器による後障害は、67年を経た今でも被爆者を苦しめています。

このような悲劇を二度と繰り返さないために、長崎は被爆の実相を伝え、核兵器廃絶を訴えてきました。

昨年は、多くの人々に核兵器の非人道性を知っていただくために、ジュネーブ国連欧州本部において原爆展の常設展を実現させました。

「2012年ピースアクションinナガサキの虹のひろば」に参加の皆様が、私たちとともに核兵器廃絶と平和な社会の実現に向けて、歩み続けることを期待いたします。

2012年8月 長崎市長 田上 富久

毎年、日本生協連と長崎県生協連の主催する「ピースアクションinナガサキ」が本年も8月7日～8日の2日間の日程で行われましたが、今年も大分より生協組合員とその家族が参加しました。



7日は、朝9時に大分駅をバスで出発、別府、日田を經由して午後2時に佐世保市に到着、まず、弓張岳展望所から米軍佐世保基地を見学し、「無窮洞」に行きました。この洞は、第二次世界大戦中に、佐世保の宮村国民学校（現市立宮小学校）の防空壕として掘られました。当時の校長の発案で昭和18年（1943年）から昭和20年（1945年）8月15日の終戦の日まで掘り続けられました。掘ったのは、先生に指導された高等部（今の中学）の生徒たちでした。男子がツルハシで掘り進み、女子生徒がノミで仕上げたといわれ、中は幅約5m、奥行き20m、生徒500人が避難できる大きさ、避難中でも授業や生活できるように、教壇まで備えた教室をはじめ、トイレや炊事場、食料倉庫、さらには天皇の写真を奉ずる御真影部屋まで設けてあり、戦時下の時代背景を知ることができました。「無窮洞」とは「無限」「終わりのないさま」という意を込めて、建造を計画した校長がつけた名前であることを聞かされました。

その後、浦頭引き揚げ記念館を見学、この記念館は、終戦以後、昭和20年10月14日米軍の上陸艇（LST）で韓国から揚陸したのをはじめ、その後、昭和25年4月まで中国や南方諸島から引き上げてきた民間人や軍人が検疫所が浦頭にあったことから

1,396,468人が祖国の第一歩を刻まれたところで、当時の服装や生活用品、検疫所の生活や故郷への帰路の姿などの写真や貨幣が展示されていました。

最後に、釜墓地に行き、引揚者の多くは栄養失調や下痢皮膚病で上陸後に不帰の人となった方、戦中や戦地で亡くなられた方など6,000人の御霊を祭ったところで、参加者全員で慰霊碑に黙祷し、ご冥福を祈りました。初日はここで終わり宿泊地のハウステンボスに行き、懇親や親子で一時的パカンスを楽しみました。

8日は早朝に長崎市に出発し、到着後、まず、平和公園や原爆落下中心地の浦上天主堂遺壁等を視察する中で、生協組合員や家族の祈りを込めた折り鶴を、慰霊塔等に捧げました。

引き続き、長崎原爆資料館を見学、「原爆投下前の長崎の街や風景、それが一瞬にして破壊されたことを語る11時2分を指したままの時計の展示や、原爆投下直後の長崎の街の惨状を再現し、原爆の恐ろしさを訴えるコーナや熱線による被害、爆風による被害コーナ」などを目前にし、身近で見ることができ、多くのものを知ること、学ぶことができました。

最後に「2012年ピースアクションinナガサキの虹のひろば」に参加し、ひろばでは、参加者全員で原爆で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするために黙祷し、オープニングとして、銀屋町「鯨太鼓」囃子方のみなさんが、古く中国の東の果ての深海に眠る神仙の鯨を呼び覚まし、空をめぐり躍り上がって天まで昇ると黄金の龍になり、人々に吉祥を招く伝説をを据太鼓と山車で表現した太鼓を披露し、主催者を代表して日本生協連会長があいさつ、長崎市長の田上富久市長来賓あいさつがあつて、講演では、「ナガサキからのメッセージ」と題して元長崎大学学長の土山秀夫さんが「原爆投下で全滅した長崎医科大学の当時医学生で、家族や多くの知人友人を失いながら被爆者の治療にあたった土山さんの原爆投下直後の長崎での体験や、市民の立場からの核兵器廃絶運動に势力的に取り組まれてきて、経験を話され、引き続き、ピースチャイルドながさき&劇団TABIHAKUの皆さんが、音楽とおはなし「ふりそでの少女」で「1945年8月9日11時2分…長崎に2発目の原子爆弾が投下された。戦争は、この町に原子爆弾を落として終わった。8月19日、爆心地から4km、滑石の打坂の畑の中で二人の少女が積み上げられた木材の上に寝かせてあった。その当時、目にするもまれな晴着を着て、薄化粧をしていた。息を呑むほど、美しい光景であった。二人の少女は、これから火葬される場所であった。…被爆者（松添博さん）が後日一枚の絵に残した悲しくも美しい原爆秘話語り」と演奏で紡ぎました。」

このナガサキ行動で、67年経った今でも忘れられない原爆の残酷さ、被爆直後の悲惨な状況等辛い悲しい体験を私たちに伝え、行動を通じて、平和への願いを参加者全員で誓い合い帰路につきました。